

## 論文番号 193

### 担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

### 題名(原題/訳)

都市住民男性の飲酒習慣ならびに飲酒量増加に関連する要因

### 執筆者

高鳥毛敏雄

### 掲載誌(番号又は発行年月日)

日本公衆衛生雑誌 2001, 48: 344-355

### キーワード

都市住民、飲酒習慣、飲酒量増加、健康習慣指数、災害

### 要旨

(背景) 都市中年男性の死亡に大量飲酒の与える影響は大きく、急死者の3～4割が大量飲酒者であったという報告がある。阪神淡路大震災において仮設住宅の孤独死の6割以上が男性であり、肝疾患死亡者の7割近くがアルコール性、肝疾患以外の病死者の4割が大量飲酒歴を持っていた。しかし都市住民男性を対象として飲酒量増加の要因を明らかにした研究はない。

(対象と方法) 神戸市在住の1995年に発生した阪神淡路大震災に被災し、1996年11月現在仮設住宅に入居していた26,678世帯、49,033人のうち、自記式の調査票に有効回答した33,414人。調査票は、飲酒習慣、睡眠、アルコール関連疾患、ZungのSDSスコアを参考として作成した精神得点、生活得点、健康習慣指数に関する質問で構成されている。このうち20歳以上の男性14,179人を分析対象とした。

(結果) 飲酒習慣を有していた者は8,661人(67.4%)であった。震災前と比べて飲酒量が増加した者は32.1%、減少した者は25.3%であった。飲酒量の増加と有意に関連していたのは、「健康状態が悪い」、「肝臓病を有する」、「睡眠障害を有する」、「喫煙本数が増加した」であった。またロジスティック回帰分析により、睡眠得点(多いほど十分な睡眠がとれていない)、アルコール関連疾患数、精神得点(多いほどうつ傾向が強い)、生活得点区分(多いほど地域との関わりが少ない)は有意な正の関連を、健康習慣指数(飲酒習慣を除く、多いほど良好な健康習慣を有する)は有意な負の関連を示した。

(結論) 大震災後という特殊な生活状況下で、飲酒量が増加した者は、健康的なライフスタイルを実現できていない者が多かった。通常的生活においては過度の飲酒習慣にいたることに社会的抑止力が働いていると思われるが、震災という特殊な環境により、潜在的に不健康飲酒になりやすい要因を有する人が顕在化してきたと思われる。これは、地域の親密でインフォーマルな安定した社会関係が解体されたり、社会環境ストレスが負荷された場合に、飲酒習慣に関連する健康問題が発生しやすいことを示している。平常時より都市住民が健康につながる生活習慣を主体的に実現できるようにサポートしていくことが重要である。